

勇太さんが全て持つてく

妻・美咲編

佐藤直人は会社の外回りを終え、時計を見た。

もう夜の9時を回っている。

隣を歩く同僚の山本勇太は、いつものように明るく笑っていた。

「いやー、今日も疲れたね！でも直人くんのおかげで無事終わったよ。サンキュー！」

勇太の声は疲れを感じさせない。

いつもこうだ。

見た目は派手じゃない普通のサラリーマンなのに、話題が尽きず、誰とでもすぐに打ち解ける。

直人は少し照れながら言った。

「いや、俺も助かったよ。：なあ、勇太。今日はうちで飯食ってく？美咲も作ってるはずだし」

勇太の目がぱつと輝く。

「え、マジで？いいの？超嬉しい！直人くんの奥さん、手料理とか最高じゃん！」

直人は苦笑する。

「大袈裟だな。でも、独身の勇太が毎日コンビニ飯じゃ可哀想だろ」

勇太は手を振って笑った。

「いやいや、俺、幸せ者だよ。こんな温かい家庭に招いてもらえるなんて」

アパートのドアを開けると、美咲の声が迎えた。

「おかえりなさい。遅かったね」

直人の妻・美咲はエプロン姿でキッチンから顔を出し、直人の隣に立つ勇太を見て少し驚いた表情にな

る。

「え、山本さん？ いらっしやいませ！」

勇太は深く頭を下げ、爽やかな笑顔を浮かべる。

「こんばんは！ 急に押しかけちゃってすみません。直人くんに誘われて…」

美咲はすぐに笑顔に戻り、手を振った。

「全然大丈夫ですよ。ちょうど多めに作っちゃったし。座っててくださいね」

夕食の席は、すぐに和やかになった。

勇太は話題の宝庫だった。

会社の面白い話、最近見た映画、旅行の思い出、料理のコツまで。

美咲は最初こそ控えめだったが、勇太の明るさに引き込まれるように笑う回数が増えていく。

「山本さん、ほんとに話が面白いですね。直人くんもいつもこんなに楽しそうに話してるの？」

直人は箸を止めて笑った。

「いや、俺は勇太に比べたら全然だよ。こいつがいると場が持つんだ」

勇太は照れくさそうに頭を掻く。

「いやいや、俺なんてただ喋ってるだけです。直人くんみたいに優しく、ちゃんと家庭を守ってる

人が羨ましいんです」

食事が進む中、美咲がキッチンに戻ってデザートの準備を始めると、勇太が自然に立ち上がった。

「美咲さん、手伝いますよ。俺、皿洗い得意なんです」

直人はソファでくつろぎながら「悪いなあ」と声を掛けるが、勇太はすでにキッチンに立っていた。

美咲は少し戸惑いつつも、笑顔で受け入れる。

「ありがとうございます。じゃあ、お皿を拭いてもらえますか？」

二人が並んで立つキッチン。

直人の耳には届かない距離で、勇太の声が小さく響く。

「美咲さん、こんな温かい家庭、ほんとに憧れます。俺、独身で毎日一人飯ばかりだから…こんな風に誰かと笑いながらご飯食べるの、夢みたいですよ」

美咲は手を止めて、勇太の横顔を見る。

勇太は皿を拭きながら、穏やかに続ける。

「美咲さんみたいな素敵な女性と結婚できたら、毎日が幸せだろうなって思うんです。

優しくて、料理上手で、笑顔が可愛くて…。直人くん、ほんとにラッキーですよ」

言葉は純粹で、悪意なんて微塵もない。

ただ、心からそう思ってるだけ。

美咲の頬が、ほんのり熱くなる。

「…そんな、褒めすぎです。山本さん」

彼女は小さく笑ったが、心の奥で何かが揺らぐのを感じた。

勇太の言葉は、ただの社交辞令じゃない。

本気で、羨ましそうに言ってる。

「山本さんじゃなく、勇太って呼んでください」

一瞬、勇太の視線がまっすぐに美咲を捉え、美咲はドキッとした。

そして、その視線が、優しく、少しでも熱を帯びていることに気づいてしまう。

直人くんは優しい。

でも、こんな風に「美咲さんみたいな素敵な女性」って、ストレートに言ってくれる人は…。

美咲は慌てて視線を皿に戻した。

でも、胸の奥で、ほのかな好意が芽生え始めていることに、自分でも気づいてしまった。

勇太はそんな美咲の変化に気づかず、明るく笑う。

「ほんとですよ。美咲さんみたいな人が奥さんなら、俺、毎日頑張れます」
直人はリビングから声をかける。

「勇太、美咲に変なこと言っていないだろ？」

勇太は振り返って、無邪気に手を振った。

「言っていないですよー！ただ、手伝ってるだけです！」

美咲は笑顔で頷く。

でも、その笑顔の裏で、心が少しだけ、勇太の方を向いていた。

美咲と勇太が協力しながら皿を洗い、それを拭きながら、
二人の手が、狭いシンクの上で自然と近づく。

美咲が皿を渡そうとした瞬間、勇太の手が彼女の指先に触れた。

ほんの一瞬、指先が重なる。

温かい感触。

美咲の体が、びっくりと反応する。

「あ……」

小さく息を漏らし、バランスを崩した。

皿が滑りそうになり、体が前につんのめりかける。

勇太の反応は素早かった。

左手で皿を支え、右手で美咲の腰を抱き寄せる。

美咲の体が、勇太の胸にぴたりと収まる。

思わず、美咲も勇太にしがみついた。

両腕が、勇太の背中に回る。

シャツ越しに伝わる彼の体温、しつかりした背中感触。

心臓が激しく鳴り始める。

どくん、どくん。

収まらない。

キッチンで、一瞬。

勇太と美咲は、抱き合ってしまう。

数秒の、静かな抱擁。

勇太の胸に顔を埋めた美咲は、息を潜める。

勇太の匂い——清潔な石鹸と、ほのかにミントのガムの香り——が鼻腔をくすぐる。

勇太は美咲をまっすぐ見下ろした。

瞳は優しく、でもどこか真剣で。

「大丈夫ですか？ 危なかったですね」

声は穏やかで、いつもの明るいトーン。

でも、その視線が美咲の瞳を捉えて離さない。

美咲は言葉が出ない。

ただ、頷くことしかできない。

顔が熱い。

耳まで赤くなっているのが、自分でもわかる。

勇太の腕はまだ、美咲の腰に軽く回されたまま。

離すのを、忘れていたかのように。

この瞬間、美咲の心は揺れていた。